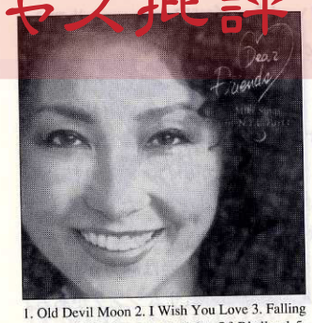
ジャズ批評 2007年9月号



1. Old Devil Moon 2. I Wish You Love 3. Falling In Love With Love 4. Lullaby Of Birdland 5. Speak Low 6. Yesterdays 7. So In Love 8. Bewitched 9. On A Clear Day 10. Goodbye
◎Benny Golson(ts),Ron Carter(b),Mike Le Donne(pf),Carl Allen(ds)

■ディア・フレンズ／山岡未樹
（ローリング・スピリッツ　RKCJ-2031）

ジャズ歌手、山岡未樹の久々の新作。今回もベニー・ゴルソンが全面協力したニューヨーク録音で、マイク・レドン（p）、ロン・カーター（b）、カール・アレン（ds）といったスター・プレイヤーたちが共演している。最近の山岡未樹は聴く度にうまくなっていくが、今回のアルバムも日本のジャズ歌手としては高いレベルにある。歌唱力は抜群だが、早い曲、ミディアム、スローもうまい。日本の歌手はバラードを苦手とする人が多いが、山岡は「アイ・ウィッシュ・ユー・ラブ」などを情感を込め、原旋律を生かし、じっくりと歌い上げていて、説得力がある。またジャズ曲「バードランドの子守唄」は抜群の出来で、このアルバム中のベストであり、日本歌手によるものでは、これ以上のものを聴いたことがない。ベースのロンとのデュオがすてきだ。「スピーク・ロウ」「ソー・イン・ラブ」などスタンダードばかりで、選曲も上々だ。ゴルソンのテナーも曲によってはソロを取っていて、アルバム全体がジャジーに仕上がっている。（岩浪洋三）

1.ハンクス・ムード, 2.アローン・トゥゲザー, 3.ノー・ベース, 4.テネシー・ワルツ　5.トランジエント・イスキーミック・アタック, 6.哀しみのダンス, 7.テイク・ミー・イン・ユア・アームズ, 8.枯葉, 9.ウィズアウト・ユー, 10.ティコ・ティコ, 11.バイ・バイ・ブラックバード, 12.ソノーラ, 13.アローン・トゥゲザー（別テイク）
◎松尾明(ds),寺村容子(p),嶌田憲二(b), MAYA (vo on 6), 西田幹(bass tb on 9)

■Alone together／Akira Matsuo Trio
（寺島・レコード　TYK-100）

DIWの中に作られた寺島レコードの第一弾。メンバー、曲目、ジャケット、解説まですべて自分の考えでやるというまるごと自分アルバムである。そして、そのモットーとするところは「曲は哀愁、演奏はガッツ」であるという。演奏は松尾明(ds)トリオで寺村容子(p)、嶌田憲二(b)である。ミュージシャンも寺島靖国が求めるものを真摯に受け止め、みごとに実現させて見せた。ミュージシャンたちの意気込みと情熱が伝わってくる演奏だ。とくに松尾明が張り切り、これまでになく、パワフルにドラムスを叩いている。また音にうるさい寺島氏だけあって、ライヴ演奏に近い迫力に富むサウンドをきかせている。

また、本格的デビューである寺村容子のピアノが注目される。彼女はすでに何枚もCDを出している日本女性ピアニストにひけをとらない実力者であり、包容力のあるプレイで共演者を鼓舞し、よく歌うフレーズで音楽を肉感的なものにしている。「アローン・トゥゲザー」「枯葉」など選曲も寺島氏好みであり、MAYA(vo)と西田幹(btb)一曲ずつのゲスト出演も花を添える。まずは成果をあげた第一作だ。（岩浪洋三）

1.My Romance Take 1, 2.On The SunnySide Of The Street, 3.My Romance Take 2, 4.Tenderly, 5.Solar, 6.Body And Soul Intermission, 7.I Could Wright A Book, 8.Going Home, 9.Taiga, 10.Soultrane, 11.GiantSteps
◎若松　孝(ts),永井隆雄(p),林　正男(b),橋本学(ds), ウィリアムス浩子(vo)

■若松孝／大河 ライヴ阿佐ヶ谷マンハッタン
（ヤングロウミュージック　WKMT−0318）

中堅テナー・サックス奏者、若松孝の初リーダー・アルバムである。若松は現在50歳、ジャズ・プレイヤーとして脂がのり切っていく年齢である。いかにもテナーらしい男性的な音色、自信に満ちたアドリブ展開にまず魅了される。そう、若松孝は確信の人である。アップでもスロウでも自分が向かう方向にまったく迷いは見せない。長尺曲でも堂々たる構成で胸のすくような見事なアドリブを展開する。その構成が優れているのは序破急のセンスが抜群であるからだ。無意味な長吹きではない。曲調の提示から着地に至る曲折の多彩さ、あっと驚かせる伏線の張り方など緊密な構成をもつ文学作品を思わせる。

彼のこうした力が最も発揮されるのはオリジナル曲の「Taiga」とジョン・コルトレーンの「ジャイアント・ステップス」。自筆の曲目メモによれば「難しい…」とあるが、いずれも薬籠中のものとしている。その力量は若松の弛みないジャズへの情熱の成果に他ならず、本作の発表を心から喜びたい。（小針俊郎）

1.Joana Francesa, 2.Acorda Amor, 3.A Little More Blue, 4.Samba De Orly, 5.Acalanto, 6.Tanto Mar, 7.O Que Sera, 8.Comecar De Novo, 9.Samba E Amor, 10.O Quereres, 11.Outros Sanhos, 12.O Seu Amor, 13.Ela Faz Cinema, 14.A Noite De Meu Bem
◎Maria De Medeiros(vo),Jeff Cohen(p), Joel Grare(ds), Emek Evci(b)

■マリア・デ・メディロス／ア・リトル・モア・ブルー
（Universal France Philips　UCCM−1120）

かつて中南米を支配したスペインとポルトガル。イベリア半島に隣接する国同志でありながら、それぞれが植民地とした地域の音楽的な結末のなんと違うことか。１０年ほど前のことだったか、渡辺貞夫がサルサを「スクエアな音楽だから好きではない」と発言したのをきいたことがある。反対に彼のサンバやボサノヴァへの傾倒ぶりは有名である。畠山美由紀の項目にも書いたがブラジル音楽の自由な包容力は国際的なスケールで浸透していく力がある。このアルバムはポルトガル出身の女優マリア・デ・メディロスのＣＤデビュー作。同じ言語で作られるブラジル音楽に親しんだというだけに、カエターノ・ヴェローゾ、シコ・ブアルキなどの作品で構成されているが、出来上がった音楽は多層的である。ブラジル音楽の上にジャズ、ファド、シャンソンまでが層々と乗っている。一聴して透明感のある美声に惹きつけられるが、繰り返せばなかなかに手強い。これが歌手デビューとは畏れ入った次第である。（小針俊郎）

内外新譜